

氏 名 石原 裕基
授与した学位 博 士
専攻分野の名称 医 学
学位授与番号 博 甲第 6335 号
学位授与の日付 2021 年 3 月 25 日
学位授与の要件 医歯薬学総合研究科 病態制御科学専攻
(学位規則第 4 条第 1 項該当)

学位論文題目 Treatment outcomes, including risk factors of stone recurrence, for hepatolithiasis using balloon-assisted endoscopy in patients with hepaticojejunostomy (with video)
(胆管空腸吻合術後の肝内結石に対するバルーン内視鏡の治療成績)

論文審査委員 教授 藤原俊義 教授 八木孝仁 准教授 内藤宏道

学位論文内容の要旨

胆管空腸吻合術後の肝内結石に対するバルーン内視鏡 ERCP に関する長期経過を含めた治療成績の報告は少ない。

2008 年 1 月から 2018 年 12 月までに胆管空腸吻合術後の肝内胆管結石に対してダブルバルーン内視鏡 ERCP 施行した 73 例を対象とした。また、処置中に遺残結石を細径内視鏡により確認した。今回、胆管空腸吻合術後の肝内胆管結石に対するバルーン内視鏡検査に関して再発リスク因子を含めた長期成績を解析した。胆管空腸吻合部への到達率は 92% (67/73)。結石除去完遂率 93% (62/67)。処置回数(中央値 1.5 ± 0.9)。合併症発生率 6.8%。結石再発 22%(13/58)。フォロー期間中央値 2.7 年(1.5-4.8)。再発リスク因子に関して多変量解析施行し、結石径 $\geq 8\text{mm}$ (オッズ比 5.57; 95% confidence interval (CI), 1.39-37.2; $p = 0.013$)。細径内視鏡による遺残結石確認(オッズ比 0.16; 95% CI, 0.0084-0.90; $p = 0.036$)だった。

胆管空腸吻合術後の肝内胆管結石に対するバルーン内視鏡検査 ERCP は有効で安全だった。細径内視鏡による遺残結石確認は再発リスク因子を低下させる可能性がある。

論文審査結果の要旨

本研究は、胆管空腸吻合術後の肝内結石に対するダブルバルーン内視鏡の治療成績を解析し、再発リスク因子を検討した後方視的臨床研究である。

胆管空腸吻合術後の肝内結石に対してダブルバルーン内視鏡を用いて結石除去を行った 73 例を対象とし、再発リスク因子を含めた長期成績を解析した。ダブルバルーン内視鏡を用いた手技では、胆管空腸吻合部への到達率は 92%であり、結石除去完遂率も 93%と高かった。結石再発は 22%に認められたが、再発リスク因子の多変量解析では、結石径 8 mm 以上で再発が多く、細径内視鏡による遺残結石確認がリスクを低下させることが明らかとなった。

本研究は、胆管空腸吻合術後の肝内結石に対するダブルバルーン内視鏡の有用性を明らかとし、細径内視鏡による遺残結石確認は再発リスクを軽減する可能性を示した点で、重要な知見を得たものとして価値ある業績と認める。

よって、本研究者は博士（医学）の学位を得る資格があると認める。